

2018年9月購入図書

No.	図書名	内容	著者名	出版社
1	トランスジェンダーと職場環境ハンドブック だれもが働きやすい職場づくり	企業とLGBTに関する相談や質問のなかでもっとも多い、トランスジェンダーの従業員への対応に関する問合せ。性科学・ジェンダー研究に取り組み、トランスジェンダーに関する著書も多い大阪府立大学教授の東優子、LGBTを含めた誰もが働きやすい職場環境づくりのための研修やコンサルティングを行う特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ、就職活動の支援など若い世代の問題を中心に活動している特定非営利活動法人ReBitが、共同して執筆にあたった本書は、多くの企業事例やトランスジェンダー当事者の生の声を多く紹介している。	東優子 特定非営利活動法人 虹色ダイバーシティ 特定非営利活動法人 ReBit	日本能率協会 マネジメントセンター
2	総務部長はトランスジェンダー 父として、女として	もうすぐ五十歳に手が届こうかという妻子もちのサラリーマンが、ふとしたきっかけで女性になりたい自分に気づき、女装を楽しむだけではなく、女性として生きたいと願うようになる。会社でのカミングアウトを経て、朝、家を出るときは男装。そのまま近所のトランクルームに入り、女性服に着替え、メイクをする。仕事を終わると再びトランクルームに寄り、朝の服に着替えてメイクを落とし、帰宅するという二重生活を続けている。多様な性に直面する現代社会を生きる、一人のトランスジェンダーの体験記。	岡部鈴	文藝春秋
3	まぼろしの「日本的家族」	2012年に自民党が発表した「日本国憲法改正草案」に明らかなように、改憲潮流が想定する「伝統的家族像」は、男女の役割を固定化して国家の基礎単位として家族を位置づけるものである。右派やバックラッシュ勢力は、なぜ家族モデルを「捏造・創造」して幻想的な家族を追い求めるのか。「伝統的家族」をめぐる近代から現代までの変遷、官製婚活、結婚と国籍、税制や教育に通底する家族像、憲法24条改悪など、伝統的家族を追い求める「斜め上」をいく事例を批判的に検証する。	早川タダノリ	青弓社
4	「ふつうのおんなの子」のちから 子どもの本から学んだこと	生きものと本が大好きな生命学者が、幼少期から親しんだ児童文学のヒロインたちから「ふつうのおんなの子」という生きかたを取りだし、その視点から見えてくる世界と可能性について魅力たっぷりに語る自伝的エッセイ。自身の生き方を「日常の中で接するものやことをよく見て、自分の言葉で考え、納得しながら暮らしてきた『ふつうの女の子の生きかた』」と語り、そんな「ふつうの女の子」が活躍できる社会になれば生きやすいのではないかと説く。	中村桂子	集英社クリエイティブ

5	「女性活躍」に翻弄される人びと	<p>管理職への昇進を拒む深い葛藤、やりがいと低賃金の狭間に生きる姿、「勝ち組」の敗北感、認められない家庭生活での活躍、そして男をも襲うプレッシャー。</p> <p>「女性活躍」推進の期待が高まる一方、「産め働け活躍しろ……! 冗談じゃない!」女たちは規範の押し付けに悩み、苦しみ、怒っている。人びとの等身大の本音を長年にわたる定点観測ルポで掬い上げ、時代ごとの生き方トレンドに翻弄される、一人ひとりの働きづらさや生きづらさの本質を解き明かし、それぞれが希望の光を見出せる社会を考える。</p>	奥田祥子	光文社新書
6	日本のフェミニズム	<p>女性たちは何を願い、何と戦ってきたのか？ 廃娼運動、売春防止法、リプロ、レズビアン運動… 日本のフェミニズムを、歴史の原点からわかりやすく解説する いまこそ読みたいガイドブック決定版！</p>	北原みのり	河出書房新社
7	面倒くさい女たち	<p>『他人をバカにしたがる男たち～職場に社会にはびこる「ジジイの壁」の正体』の女性版。ANAのCA、女子アナとして「女性の集団」の中で得た経験からもデータを集積、分析する。職場や社会に氾濫する「めんどくさがられる女」を、「社会(=他者、組織など)との関係性の中の女性」という視点で、実証研究や理論から紐解く。そしてそれらを理解することで、女性の扱いに悩む男性社員の悩みを解消し、女性が輝くヒントを提示する</p>	河合薫	中公新書ラクレ
8	不道德お母さん講座： 私たちはなぜ母性と自己犠牲に感動するのか	<p>2018年、小学校で道徳が正式科目になったことを踏まえ、歴史を遡り、日本の「道徳」がつけられた過程と、母性幻想と自己犠牲に感動を強いる「道徳教育」の問題点をあぶり出す。</p> <p>『女の子は本当にピンクが好きなのか』著者最新刊、いま誰もが読んでおくべき、日本の「道徳」解体論！</p>	堀越英美	河出書房新社
9	問題だらけの女性たち	<p>女の脳は小さい？ 女が考えると生殖器がダメになる！？19世紀の女性たちがいかにバカバカしい迷信と固定観念に苦しめられたか、ユーモアと皮肉炸裂で描くイギリス発ジェンダー絵本。笑うに笑えない、19世紀ヴィクトリア朝の「大問題」な女性観。何をしても「問題」があると決めつけられ、「歴史のゴミ箱」に捨てられた女性たちをすくい上げる。</p>	ジャッキー・フレミング	河出書房新社

10	フェミニストとオタクはなぜ相性が悪いのか 「性の商品化」と「表現の自由」を再考する	男のエロは「権力」である――。 AKB48、地方自治体の萌えキャラ、村上隆や会田誠の現代アート、AV強要問題、そして「慰安婦」問題……。さまざまな性の表象があふれ、社会問題を抱えている現代ニッポン。たとえば二次元エロをめぐる議論は「表現の自由派vs表現の規制派」という対立軸だけに安易に回収されてしまうようなこの国で、「女でいること」はなぜこんなにも息苦しく、難しいのだろうか。精神科医とフェミニストが、いま日本社会で「問題」と感知できなくなっている性の「問題」をめぐり、改めて女たちにとってのエロスを考えていく白熱対談。	香山リカ、北原みのり	イースト・プレス
11	誰も教えてくれなかった 子どものいない人生の歩き方	子どものいない人は3人に一人という新たな大人時代。自身も子どもが欲しくて持てなかった経験を持つ著者が、「子どものいない」100人以上の声から見えてきた事や、脳科学・心理学・母性・不妊・社会学の専門家インタビューを踏まえ、これから自分らしく生きていく九つのヒントを提案している。	くどうみやこ	主婦の友社
12	忘れる女、忘れられる女	謝罪会見にふさわしい女性の髪型を考え、子ナン独身女性知事の誕生に感慨を覚える私は、台風直撃の沖縄で50歳を迎えた…… 「負け犬」「子ナン」「男尊女子」などの言葉で時代を切り取ってきた著者が見つめる、女たちの悲喜こもごも。 政治でも芸能でも忘れてもらえない女が目白押し。スキャンダル全盛の日本を映す大人気エッセイ！	酒井順子	講談社
13	日本のヤバい女の子	イザナミノミコト、乙姫、かぐや姫、虫愛づる姫、皿屋敷・お菊――。 日本の昔話や神話に登場するエキセントリックな「女の子」たち。キレイやすかったり、バイオレンスだったり、そもそも人間じゃなかったり。彼女たちは自由奔放に見えても、現代を生きる私たちと同じように理不尽な抑圧のなかで懸命に生きていた。 作者は、友達とおしゃべりするように、彼女たちの人生に思いをいたして涙を流し、怒り、拍手と賛辞を送る。ときには、ありえたかもしれないもう一つの人生を思い描く。時空と虚実を飛び越えたヤバい女子会が、「物語」という呪縛から女の子たちを解放する。	はらだ有彩	柏書房
14	偽姉妹	あるとき3億円の宝くじが当たった真面目で地味な正子(35歳)。当せん金で『屋根だけの家』という風変わりな家を見て、イケメンの夫・茂と息子の3人で暮らしていたが、茂の浮気で離婚。シングルマザーになった正子は、姉妹の絆子・園子と暮らすことに。ただ、姉妹同士の共同生活に息苦しさを感じはじめた彼女は、奇想天外なアイデアを思いつく。	山崎ナオコーラ	中央公論新社